僧侶と魔女

20230501

エリー

目次

本文 1
あとがき 4

本文

　愛梨は今日も寺の尼に会いに行く。
　いつ来てもあばら家にしか見えない小さな寺に入る。
　外観に反して、内装は整えられている。
　足元の床はつやつやと光を放ち、空中にはほこりも舞ってない。
　奥の暗がりにはトウモロコシほどの小さな木彫りの菩薩が置いてある。
　彫りたてなのか、まだ黄色く、表面がでこぼこしている。
　足音がして、年老いた尼が現れる。
　小柄だが存在が強い。
　ツルツルに剃った頭。シワだらけの額。艶やかなピンク色の頬。紫色の作務衣。猫柄の足袋ソックス。
　ちぐはぐなファッションが、「気取らなくていいよ」と話しかけているよう。
　仏像の上手に尼、下手に愛梨が座る。
　菩薩像に手を合わせ尼が話す。
「愛梨さんの心は、食べかけのお皿が並んだ乱雑な机のようでした。終わったことを片付けずに、どんどん腐敗させていました。苛立ち、怒り、憎しみでいっぱいでしたね」
　愛梨も菩薩像に手を合わせて答える。
「はい。修行を続けて心になにもない状態になれました。でも.....」
　尼が愛梨を抱きしめる。
「分かってます。ここでの修行は終わりにして、魔女のところへ行きなさい」
　メモを渡される。住所と地図が書いてある。
　戸惑いを隠せない愛梨を見て、尼が力強くいった。
「大丈夫。ここで修行したわたしの娘なの。クリーンになった心に特定の感情を抱かせる方法を教えてくれるわ」
　決意が決まった愛梨は、立ち上がり、その足で魔女に会いに行く。

　地図は大きな駅の前の雑居ビルに印がつけてある。
　エレベーターで最上階の６階まで上がる。
　扉が開くと別世界が広がっていた。
　広い玄関にはハーブらしきプランターがたくさんおいてある。
　コーヒーの香ばしい香が充満していて、ハーブの香はしない。

玄関先には黒いミュールが揃えてある。キラキラ光るビーズと羽根つきの豪華なデザインだ。
「愛梨さんね。奥まで来てちょうだい」
カチリとロックが外れる音がして、内開きの扉が開く。
「お邪魔しまーす」
ヒールを脱いで揃える。
扉をくぐる。
壁一面、紫色のビロードの幕に覆われている。窓はない。
天井は金色に輝く。
間接照明に照らされ、蝋燭の炎のようにほの暗い。
奥の椅子に魔女らしき人物が座っている。
真っ黒いとんがり帽子。顔はつばに隠れて見えない。ウエーブした真っ赤な髪が胸まで垂れている。豊かなバストをつつむ黒いドレスがセクシー。
魔女の前には大きな黒檀の机がある。
机の上には紫色のビロードのクロスが敷いてある。その上には名刺サイズのカードが高く積み上げられている。
手前には空いた椅子が二脚ある。
「お座りになって」
踏み出すと足元の絨毯に体が沈む。毛足が長く、新鮮な血液のような赤色をしている。
愛梨が椅子に座ると魔女が顔を上げた。
薄い赤茶の瞳はなんでも見透かしそう。
真っ赤に塗られた唇が、ふっと微笑んだ。
「なにもないテーブルに１つだけ料理を乗せたら気持ちが今、ここに集中する。つまり自分が欲しい反応を引き出す料理を乗せればいいわけ。想像でいいの。お分かり？」
首をかしげる愛梨に魔女が聞き返す。
「妄想はだめなのに、想像はいいのか、疑問に思っているでしょ？」
図星を突かれて赤くなった頬を押さえる。
「妄想は現実だと思い込んでいる。想像は現実から離れて思い浮かべていると気づいている。わかっていて反応してる。それが演技のコツよ」
魔女がカードを左手で崩す。両手で時計回りに混ぜ始める。６枚裏返しで積んで、７枚目を表に返す。
「このカードはライダー版のタロットのペンタクルの３の逆位置ね。異なる３人の専門家が、力を合わせて教会を建てる場面。正位置なら技術を表す。逆位置だと未熟さを表す。未熟と聞いてどんな感情を抱く？」
愛梨は胸を押さえて苦しそうに呟いた。
「違う、そんなことない。違わない、その通り。相反する感情に揺れて、いつまでも考えてしまうモヤモヤした感情です。エゴサで大根役者と書かれていたわたしの気持ちがそうでした」
魔女がカードの上下を入れ換える。
「では正位置の技術なら？」

　一瞬、間があいて愛梨が首をかしげる。
「そのものになりきって周りを気にしない。一心不乱な気持ちかな。集中できるようになったわたしでしょうか」
　親指を立てて魔女がニッコリ笑う。
「過去に起きた不幸な出来事に気をとられたり、周りの反応を気にしたり、注意が散漫なのは仏教的な心の修行が効果的なの」
　カードに魔女が手を置く。
「心をクリーンにしたら、自在に感情を呼び出せるように訓練する。そしてなりきる。感情を表現することでカタルシスを与えるのが、魔女の修行なの。熱狂させる」
　キラキラと愛梨の瞳が輝き出す。
「そのためにはいろんな感情を知る必要がある。組み合わせることもできる。タロットはとてもいい訓練になる。やってみる？」
「はい！」
　即答した愛梨に迷いはもうない。
　僧侶の清浄と魔女の熱狂を身に付けた愛梨はスターダムを駆け抜けるだろう。

あとがき

官能だと娘が読んでくれないので、官能じゃない話で再びカメラワークの練習をしました。

基本ルールが分かっても、実際に書いてみると判断に迷う。経験不足？

僧侶と魔女20230501

著　　ELYE

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社